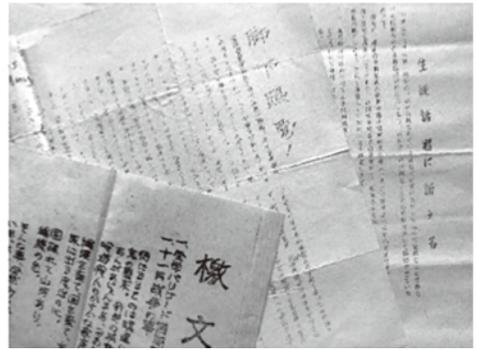


50年前の「政治の季節」の 高校生群像が訴えかけるもの

『鉄筆とビラ「立高紛争」の記録
1969-1970』出版にあたって

首都大学東京・専修大学・高崎経済大学講師 小泉 秀人



2020年、東京オリンピックの「お祭りさわぎ」の後、私たちの眼前に広がるのは、どのような光景だろうか。

今から約50年前にも、「お祭りさわぎ」があった。1968年、わが国での「明治百年祭」と1969年、アポロ11号の月面着陸。1970年の大阪万博も喧伝され、世は「高度経済成長」が謳歌されていた。

それらは、「近代化＝文明礼賛」ムードとまとめられようが、それに対し、日本でも世界でも「異議申し立て」の行動が目立った。経済成長の陰で進行する公害の告発、ベトナム戦争に対する反戦運動。1968年には日大、東大をはじめ全国の大学にバリケード（注1）封鎖が広がり、1969年1月、東大安田講堂に籠城する学生たちへの機動隊の放水や催涙ガス弾発射と学生が行う火炎瓶による応戦はTVでライブ映像が流された（問われていることは違うが、「放水・催涙ガス弾対火炎瓶」という構図は、まるで、現在の香港で起こっている事態を思わせる）。フランスでも、1968年に学生たちがパリの中心部にバリケードを築いた。

当時は、春闘と呼ばれる賃金確定交渉に伴うストライキで鉄道が停まることもよくあったし、4.28 沖繩デー（注2）や10.21 国際反戦デー（注3）には数万人規模の集会やデモが行われていた。また、毎週土曜日の新宿駅西口地下広場は、フォークソングを歌う数千人規模の若者たちで埋め尽くされていた。

そんな時代に、私たちが通っていた都立立川高

校（以下、「立高」と記す）でも、1969年10月にバリケード封鎖が行われ、翌年まで「紛糾」が続いた。その当時、バリケードを築いたり、それを支持した生徒たちだけでなく、それに反対した生徒たちやそのどちらでもない生徒たちが、ガリ版（後述）に手書きでビラを印刷して約1200名の全校生徒にさかんに配った。そうしたビラや、職員会議の名で全校生徒に配られた文書など、私も今でも持っている。それらに基づいた記録を残そうというプロジェクトが立ち上げられ、私も加わった。その成果は、小稿のサブタイトルに掲げた題名の本（以下、「小著」として出版されることになった。その準備のさなか、茶色くなった50年前の243種類の資料群を解読しながら、私の胸に去来したものは、積年の疑問に対する一つの仮説だった。

疑問とは何か。フランス革命なり、ロシア革命なり、「平等」や「自由」を掲げていたはずのものが、多くの犠牲を払った上で、なぜ「恐怖政治」や「独裁」に帰結したのか、ということだ。世界史の研究者でもない私だが、どうしても、その疑問がぬぐえない。よりよい改革をめざすことが、とんでもない結果を招くのなら、現状の「保守」をこそ目標とすべきなのか。「愚かな我々」は、「賢人」に委ねて、その導きによって得られる(?)「ボックス＝ローマナ」のような「平和」に満足しなければならないのか。

そうした疑問に対する答えとして、一つの仮説が閃いた。そしてそれは、こんにちの社会に生起

している多くの問題の解決の糸口にもなり得るものに思えたし、実は現在、その萌芽も現れてきているようにも思えた。

注1・・・建物を封鎖したり、攻撃を阻んだりするために妨害物を構築したもの。

2・・・1952年4月28日、サンフランシスコ講和条約の発効で日本は「独立」したが、沖縄はアメリカの施政権の下におかれた。本土から米軍基地が移設され、人権が蹂躪された。このため、沖縄では4月28日は「屈辱の日」と呼ばれた。この日、本土でも、政府に反対する立場からの政治的な催しなどが行われた。

3・・・1966年10月21日、当時の日本の労働組合の全国的な連合組織である総評（日本労働組合総評議会）が「ベトナム反戦ストライキ」を実施し、全世界にベトナム戦争反対を呼びかけたことに始まる。

「立高紛争」とは

立高は1901年創立の旧制府立二中（一中は現在の都立日比谷高校）を前身とする。そこで1969年10月22日未明、2階部分（8教室、3職員室などがあった）がバリケード封鎖された。その2日前に「反戦・反安保（日米安全保障条約）10.21ストライキ（授業放棄）」を訴えるピラが一部の生徒により配られ、生徒会執行部の申し入れを教員側が受け入れて午後の授業はクラス討論に変えられた。そこで賛成多数でストライキを決議したクラスはなかったので翌日は平常授業が行われたが、ストに賛成する生徒たちは構内で無届集会を開いたり、校外外でデモを行ったりした。そして、その翌日の22日未明に校舎の一部が封鎖された。ここに端を発し、26日未明にバリケードは解除されたが、その後も授業は行われず、クラス討論や生徒総会などが行われた。授業全面再開まで約一か月を要し、再開後も「紛糾」は続いて4名の退学者などを出す事態となった。この経過を、以下の6つの時期に分けて、もう少し詳しくみたい。

①バリケード封鎖以前 ②バリケード封鎖期間
③クラス討論と生徒総会 ④ロックアウト（学校側が生徒の校内への出入りを禁止する）に至る経過と授業再開 ⑤生徒会再建 ⑥退学処分撤回闘

争と講座制の準備

①立高より早く「紛争」状態にあった都立青山高校で、9月に警官隊が導入されて1名の生徒が逮捕された（小林哲夫氏著 中公新書『高校紛争』）。

当時、立高の近くの立川基地や横田基地から、ベトナム戦争に向かう米軍機の離発着が連日のように行われ、爆撃で罪のない母子たちが犠牲になっているニュース報道に、当時の多くの立高生は正義感を燃やしていた。そういったなかで、立高の校内でも、「我々は安穏と日常を謳歌しているのか」「こうして授業を受けていることが、学校に対する管理強化や、ベトナム戦争に協力している日本政府を支えてしまっているのだ」などといった訴えがなされていた。

②「反戦・反安保 教育秩序に総叛乱を」と呼びかけてバリケード封鎖がなされた。

生徒会執行部は「バリケードが提起した問題を考えよう」と呼びかけ、クラス討論や生徒総会が行われた。定時制課程の文化祭が25、26日に予定されていたこともあり、24日に教員側はバリケードを実力で解除しようとしたが、約100名の生徒たちが座り込んで断念させた。24日の生徒総会で「バリケード自主解除」が賛成多数で可決され、25日には、その決定の撤回を訴えていたバリ派（バリケードに入った生徒や、解除後に行動を共にした生徒たちのことを、こう呼んだ）は26日未明に「自主」解除した。

③連日クラス討論や生徒総会が行われ、大別して「授業即時再開」「生徒主導で一週間のクラス討論」「クラスという枠にとらわれず、主体的な個人による討論」の3提案のうち、クラス討論の案が2回にわたる生徒総会で可決され、それを集約する「クラス討論運営委員会」が作られて連日開かれ、内容を集約して全校に伝え続けた。討論の大勢は「授業再開、カリキュラム改革」「生徒心得の改正」などでまとまりつつあった。

④③に記した2回目の生徒総会で可決された案は、「納得ができたクラスから授業再開」を含んでおり、授業も行われ始めた。3回目に予定されてい

た生徒総会で、授業再開案の可決は必至の情勢だった。ここでバリ派は、「教員側が自己批判せず。なしくずし的に授業が再開されることは許せない」として、教員側に5項目要求と質問状を出し、要求された回答期限が短すぎるとする教員たちを晩秋の深夜の野外で監禁状態にした。教員側は警官隊を呼んで監禁状態を解き、翌日以降も混乱を收拾できないとして一週間のロックアウトに踏み切った。

校門が閉まり、学校には入れない状態で、有志生徒が始めた3項目の署名（ロックアウト解除、授業再開、バリ派の5項目要求反対）は全クラスに推進者が現れる事態となり、数日間で目標の「全校生徒の三分の二」にあたる800名の署名を集めた。ロックアウト解除後の生徒総会で授業再開が可決されたが、再開された授業を実力で阻もうとするバリ派の動きが目立った。

⑤授業再開が議決された生徒総会で生徒会長は辞意を表明し、執行部も解散した。これを受けて、生徒会の議決機関である中央委員会（各クラス2名の中央委員からなる）は「会長代行」を選出して「暫定執行」が選任された、とした。これに対して生徒会の監査委員会が「生徒会会則違反であり無効」と主張、「会長代行」を推すバリ派と対立した。投票箱を破壊したり、投票を妨害するバリ派に対して、スクラムを組んで投票箱を守ろうとする生徒たちもあり、監査委員会は新生徒会長の当選を発表し、生徒会は再建された。

⑥授業や選挙などに対する妨害などを理由として、職員会議は12月31日に4名の退学者と24名の確約書提出者を決め、家庭訪問などで該当者とその保護者に通知した。

3学期が始まり、退学者の何名かと在校生、他校生などが登校時間帯にデモで校門を突破しようという動きが連日続いたが、やがてなくなっていった。

一方、新生徒会執行部は講座制（自由選択科目）の具体化を全校に呼びかけ、講座制検討委員会を中心に旺盛に短期間で要求を集約し、教員側と折衝して新カリキュラムが正式に決まっていた。

50年前の「政治の季節」とバリ派が与えた衝撃

現代の多くの高校生にとって、「政治の話題」は重いものだろう。まして、自己の主張をビラにして全校生徒に配るなど想像もつかないことかもしれない。

しかし当時の立高生にとって政治は身近だった。運動部のコンパでも、ベトナム戦争や東大闘争の話題が飛びかっていた。また、当時ビラを作るには、ヤスリ板の上にロウ原紙を置いて、鉄筆という道具で原紙に文字を書いて（これを「ガリを切る」と言った。小著に写真あり）手動のガリ版印刷機や当時最先端の輪転機で印刷した。コンパの仲間で歌うための歌集とか夏合宿の栞等は、こうやって生徒たち自身が作っていたから、ガリ版で印刷物を発行するハードルは低かった。

このような「政治の季節」の雰囲気は、「立高紛争」とは明らかに性質が異なるが、村上龍氏の『69 sixty nine』（文春文庫）にも活写されている。

さらに、立高生たちの間では、当時の政府の教育政策が「3%のハイタレント（高級労働者）とそれ以外とを早期に能力主義で選別しようとしている」という批判がよく聞かれた。地域のトップエリートとして、その「3%となるべく教育を受ける」ことへの後ろめたさ。それは、公害をまき散らし、ベトナム戦争に協力する今の「体制」を支えることになるのではないか…そういった自己の「日常」をこそ否定しなければならない。ストライキで授業を放棄し、日常の秩序を支えるもの全て（クラス、クラブ、生徒会…）を「解体」していかなければならない、といったバリ派の主張が与えた衝撃は大きかった。

ちょうど、世の中に対してと同様、あるいはそれ以上に、自分自身の「理想とは程遠い現実」を狂おしく感じ始めていた高校生という年頃、バリ派の「自己否定」「日常性を脱却せよ」といった訴えは心に刺さった。彼らの「追及」を真正面から受け止めて動揺し、心の平衡を失った学友もいた。他の原因もあり、自ら命を絶った学友もいた。

当時のバリ派の主張をはじめ、重要だと考えたビラ・文書類は、小著にその一部を引用した。ぜひご覧いただきたい。

私たちが学んだものと未来への希望

だが、バリ派はついに少数にとどまった。なぜだろうか。実は私自身も、バリ派の主張に一時惹かれていた。そういう自分自身を顧みながら、以下述べていきたい。

バリ派は、自分たちの主張を「正しい」とし、それ以外の考えを「敵」とした。「一般生徒」から、素朴な質問が生徒総会などで出されると、「程度が低い」と言わんばかりに一蹴し、自分たちの主張を述べた。そして「敵」や「程度の低い」意見を徹底して攻撃した。彼らとの「討論」は、感性も含めて彼らと一致しなければ終わらないものだった。一例を挙げよう。先述の経過の⑤で紹介した、生徒会長選挙投票日の前日に、彼らは「質問がある」と言って監査委員会室を訪れた。やり取りは約3時間続いて午後6時ごろになり、「埒が明かない」と判断した監査委員たちが帰ろうとすると、「我々が納得する回答をしていない」として退室を阻んだ。つまり、自分たちの「正しい」主張に賛同しない者の自由や、権利を奪うことも、「正しい」からこそ正当化してしまうわけである。これが、フランス革命でロベスピエールも陥った「落とし穴」なのではないだろうか。冒頭に掲げた疑問に対する、回答としての仮説が、これである。

バリ派の主張に対して、初めは大多数の生徒が真剣に耳を傾けていた。むしろバリ派にひかれ、経過の②で記した、教員たちの「バリケード実力解除」に反対して座り込んだメンバーの中から、バリ派と決別し、「否定のみで終わるのでなく、建設的な改革を」求める勢力が急激に成長していったことは、小著に描いた。バリ派と決別した彼らは、さまざまな意見の違いを認めた上で、一致点を探り、ぶつかり合いながら前途を創造する道を選んだ。また、「授業を受けることは悪だ」というバリ派の主張に対して、「より良き方向を

見出すためにも、学び続けていかななくてはならない」と応酬し、それが自由選択科目設置という形で実現した。

つまり、民主主義と学習権が、「落とし穴」に陥らず、問題を良き解決に導く鍵なのではないだろうか。こんにち、民主主義は、政治や社会の中で、あまりにもなおざりにされていると感じる。それに対して、2015年、日本の国会を取り巻いたSEALDsの若者たちは叫んだ。「民主主義ってなんだ？」と。

1968年、69年の世界的な若者たちの運動は、アメリカの一部の州やフランスなどでは、大学への学生参加や中等教育への生徒参加の制度を生んだ（本の泉社『歴史のなかの東大闘争』所収の乾彰夫氏の論文『一九六八年と学生参加』）。当時の日本ではそうした結実はみられなかった（立高の例は貴重か？）が、50年後のいま、わが国でも、これまでになかった動きが見られる。例えば、大学入試改革での「民間委託」や「記述式」の問題について疑問の声をあげた高校生たちは、大学教授たちと勉強会をもったり、国会で記者会見を行ったり、短期間で何万筆もの署名を集めたりして、勿論彼らの行動だけが原因ではなからうが、要求の実現をかちとった（2020年1月5日『朝日新聞』1,2面）。

知人の大学教授から2019年末に聞いた話を記して、小稿の結びとしたい。彼は言う。「ここ何年か、明らかに変わってきている。自分の所に来る卒業生たちの中で、NPOを立ち上げて弱者支援の活動をしたり、大学院生が大学の枠を超えて集まり、社会に対して自分たちが何ができるか、模索したりしている若者たちが増えている。2020年は、ターニングポイントになるかもしれない。50年前の記録の本、時宜に合っているかもしれませんよ。」

2020年をターニングポイントに。

ターニングポイントにこの本を。

『鉄筆とビラ「立高紛争」の記録 1969-1970』（都立立川高校「紛争」の記録を残す会 編）は2020年3月同時代社より発行